



Title	並河寒泉撰『難波なかつかみ』翻刻と解説
Author(s)	矢羽野, 隆男
Citation	中国研究集刊. 2003, 34, p. 79-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61090
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

並河寒泉撰『難波なかづかみ』翻刻と解説

矢羽野隆男

『難波なかづかみ』は、懷徳堂最後の教授である並河寒泉（一七九七—一八七九）が著した通俗的な内容の能楽の小品で、大阪大学附属図書館の懷徳堂文庫に寒泉手稿本が存する。この資料の内容については、すでに吉田鋭雄「懷徳堂所蔵 懷徳堂先賢著述書目」（『懷徳』第一九号、昭和一四年）が次のように紹介している。

難波なかづかみ

寒泉先生手稿

仮綴一冊

文久二年正月難波の南に子飼ナカツカミの豹が見世物に出たといふ由來に就て、横浜の遊女が義烈を歌ふた戯作ものである、凡て四葉。

この解説によって、見世物の豹を題材にして遊女の義烈を称えた作品であることが知られる。ただ、その「義

烈」の中身に触れていないため、ここから主題を察することは難しい。また、本資料の内題下に「寒泉戯作」とあるのに拠つて「戯作もの」と紹介することにより、洒落本・人情本・滑稽本など通俗小説の類かという印象を与える。このように主題、表現に関しては補足と修正とが必要である。また見世物の豹という題材についても、若干の補足により、本資料成立の歴史的背景が明らかとなろう。

本稿では、先ず懷徳堂文庫蔵本を底本とする翻刻を掲げ（注し、次いで題材・主題・表現について解説を付した。

難波なかづかみ

寒泉戯作

世に伝ふ、言の葉しげき口々に、虚実(きょじつ)はそれ共(とも)、白真弓(しらまゆみ)の、中にも直なる其道は、貴賤尊卑にかゝはらず、なには(難波)の事も中つかみ、取る道なれば聞ままに、こと精くも語り申さん。

〔語〕抑(おさへり) ことし文久二年の正月 〔チ〕中比(なかひ)、難波の南に当て、子飼(こひ)の豹(ナカヅカミ)を見す。其由来を尋るに、比は安政の末とかや。横浜といふ里に一人の遊女あり。ゑみしのかたらひに來りしか、ある日ゑみしの言様、(船)「わか船に綾羅・錦繡をあまた積たり、汝の望み任にすへし」と有りしかは、遊女少しものそむ気色なし。又言様、伽羅・麝香・玳瑁・珊瑚珠も、山のことくつみ來りたり。何にても汝が望に任すへし」と、重ていひしかと、ついに一つものそます。「傾城の身として、何一つ食はらぬは、異

な女かな」とゑみし大に怪しめは、(おおい)「わらはとても木石にあらされは、望のなき事は候はし」と對へしかは、(その)「其のそみとは何もの」と、ゑみしせまつて尋ねれば、(とら)「それ虎といふものは、百獸の長とはきけと、画にこそ見、遂に真ものを見たることなし。されは虎をこそ望む所なれ」といふ。ゑみしも「こは」と驚き明きしか共、さらぬ体にて、「安きことよ」とて返にしか、又の便りに小き豹を持來り、「これこそ望みの虎なり」とて予へければ、さなから女ななり。豹と虎とのけぢめもなく、唯悦(よろこび)の眉をあげ、子飼餌飼に日を楽しみ送り、一月斗りも立ぬれば、秋かせの吹ままに、八百の財に売りしろし、其十の四つをもて、我か身のしろとなし、遂に花のちまたの門を立離れたり。さてゑみしにかくく(かく)のこと、告ければ、ゑみし太打ゑみ、(はなはだ)「それこそわれも

解説

一 題材（豹の見世物）

そもそも舶来の珍獣は近世初頭から既に人気の高い見世物で、従来長崎に舶載されたが、安政五年（一八五八）の日米修好通商条約締結の後、新たに開港した横浜への入港が多くなった。『難波なかつかみ』（以下『なかつかみ』）の題材となった見世物の豹も、こうして横浜に渡来したものである（注三）。

万延元年（一八六〇）五月下旬に一隻のオランダ商船が横浜に來航した。その貨物の中に豹の子がいた。それを聞きつけた江戸の香具師仲間らは横浜へ出向いて購入し、七月下旬から江戸の西両国で見世物興行が催されることとなった。

この豹の見世物は江戸で大評判を取った。もつとも、当時の大衆には豹と虎との区別がはつきりとはつかず、「虎」として宣伝されもした。例えば『舶来虎豹幼絵説』に「見る者日毎に数万人、虎といひ豹と称へ、又豹は虎の牝なりとし、諸説区々にして一定せず。」と記され（注三）、また豹を描いた当時の錦絵やビラも、それを「虎」と称

望む所よ、いまよりは妻ともなし、国へもつれゆかん」とありければ、遊女もつての外に気色をかへ、「汝氣がらひ畜生め、今迄はわれ匪類の身なれば、汝をまらふどよ様よといひてもてなしたれ。ああ勿体なや、われはこれ日の本の御神の御末なるぞ。汝畜生如きものに、再び言はをかはさし」と、いひもはてずのゝしりすて、袂を払ひ立去りぬ。ゑみしは唯茫然として夢の如し。なんぼういさましき遊女にてはなきか。

（上哥）かゝるためしを日の本の、く（かかるとためしを日の本の）、匪類遊女の末迄も、かく斗り義烈を取ぞかし。まして干戈を枕とし、太刀や刀を横ふ武士は、申も中々愚なり。下民草に至る迄、かゝる義烈のかせに靡なは、此日の本の御運、千秋万歳と目出度き御世を仰ぐ哉、く（目出度き御世を仰ぐ哉）。

ぐはんぜ無魂大夫令章句志也

している。江戸の人々に動物に関する知識が乏しかったことに加えて、文化史的にも圧倒的に虎の認知度が高かったことにもよう(注4)。

この豹の見世物は、江戸を皮切りに東海道を経て、大坂は難波新地での興行となった。『大阪繁昌詩』にも「文久二年壬戌春、夷虜齎す所の豹」と題する詩が収められ、「郊南珍獸時々来、昔日駱駝今日豹」と詠まれている。その時期(文久二年壬戌春)・場所(郊南)は、『なかづかみ』の「抑ことし文久二年の正月中比、難波の南に当て、子飼の豹を見す。」と一致することから、寒泉が関心を抱き、その由来を尋ねたという豹がこれとわかる。

『なかづかみ』は風聞の記録らしく時代状況を映している。例えば、「ゑみし」(以下「えみし」。史実に照らせばオランダ人を指す)が珍品を満載して横浜に来航したという『なかづかみ』の記述は、外国商船が長崎に代り横浜に来航するようになった当時の状況を描いている。また『なかづかみ』は、えみしが豹を虎と偽って遊女に与え、また遊女も虎・豹の違いに頓着しない、と記すが、これらの点は虎・豹を混同していた当時の認識を映している。

風聞の記録であるから、『なかづかみ』に史実を読み取るのは危ないが、見世物が世間に与えた影響の一端は見

て取ることができる。そのような意味で、『なかづかみ』は見世物史の資料となりうるのであろう。

二 主題(華夷思想・攘夷論)

『なかづかみ』は遊女の「義烈」を賞賛する作品であるが、その義烈は「えみし」に対して発揮された義烈であった。「綾羅・錦繡」「伽羅・麝香・玳瑁・珊瑚珠」という財貨の誘惑に負けず、また商人の妻としての裕福な生活を放棄し、「日の本の御神の御末」という自らの精神的価値の優位を主張して「畜生」を蹴散らし、ひいては「日の本の御運」を隆盛に導くに足る、そのような遊女の言動こそが「義烈」の中身である。いわば華夷思想に根ざした攘夷的な遊女の言動、それを称揚することが、この作品の主題である。

寒泉は赤穂義士を敬慕する慷慨家であった。尊王攘夷の思潮の盛んであった時期には、「義氣」「和魂」を唱道し、志士の詩歌をまとめて『慷慨集』と題した詩集を愛読した。また維新後も洋品を用いず、鬘を結って遺風を存したという(注5)。「なかづかみ」にはそんな寒泉の攘夷的心情がよく表れている。

ここで懷徳堂の対外観を振り返るに、中井竹山・履軒

の対外観は、総じて積極的なものではなかった。竹山は、中国・朝鮮・琉球との交易は日本経済にとつて有害であり、生産技術（特に薬・紙・書籍）において遜色ない日本としては輸入を制限すべしと説いた。朝鮮通信使についても、財政逼迫の中「千載属国たる小夷」に過ぎない朝鮮の使節を国を挙げて歓待する意味は無い、規模を縮小して対馬で応接せよと説く。また、ロシアの南下で緊張する蝦夷地については、農業技術の伝授や交易など経済的な見地からの蝦夷地開拓は主張したが、ロシアから侵攻を受けた場合には「[交易の] 府を徹して済すべし」として蝦夷地を国防の対象とみなさず、対立を回避するよう説いた^{〔注8〕}。履軒も、中国・琉球との交易や朝鮮通信使については竹山とほぼ同じ見解ながら^{〔注9〕}、蝦夷地については、「今までかけはなれてありしものを、別に事を通じて之を近付、何の益あらんや」^{〔「辺策」〕}と、蝦夷地を不毛のまま開拓せずにおく方が国防上得策であると論じ^{〔注10〕}、竹山より更に対立回避の傾向が強かった。竹山・履軒を師とした実業家山片蟠桃もほぼ同様である^{〔注11〕}。

このように、竹山・履軒ら懷徳堂の対外観は、経済的利害の見地から、あるいは日本を優位と見る自己意識から、外国との交易・交際には縮小志向であった。また外

国の脅威には、できる限り対立を回避する穏健な姿勢であった。しかし、西洋列強の進出で対外的危機が増大した幕末、尊王攘夷論の高まりの中で、寒泉の対外観も当時の思潮と軌を一にして華夷思想を先鋭化させ排外的なものとなったようである。

これまで、寒泉の事績については数編の文章が紹介しているが^{〔注12〕}、その思想については殆ど研究がなされていない^{〔注13〕}。例えば、『なかづかみ』には寒泉の攘夷的心情が吐露されるが、時事に即してどのような対外観をもっていたのかという研究は、管見の限りでは見当たらない^{〔注14〕}。幸い井上了「大阪大学蔵『並河寒泉文庫』簡介」^{〔「懷徳」第七一号、平成一五年〕}によって大阪大学蔵「並河寒泉文庫」の全体像が示され、環境が整備された。寒泉関係の資料調査およびその思想研究が待たれるところである。

三 表現（能楽）

『なかづかみ』は、内容は通俗的ながら、その表現・構成は能楽的構成をとっている^{〔注15〕}。能の構成は、全体を序（冒頭）・破（主体）・急（結末）の三部に区分する「序・破・急」の理論にのっとりてなされる。複雑な構

成になる場合もあるが、三部構成が基本である。また、シテの中入りの有無により単式能・複式能に分けられる。『なかづかみ』の場合、序「世に伝ふく語り申さん」、破「抑ことし文久二年く遊女にてはなきか」、急「かかるためしを日の本のく目出度き御世を仰ぐ哉」の三部構成、かつ、シテの中入りのない一場構成の単式能で、極めて単純な構成になる能楽作品といえる。

本文の途中に記された「語」^{かたまり}「チ（地）」^ぢ「上哥」^{あげうた}は、能楽を構成する謡（うたい）の単位である。「語」はシテやワキが物語をする、節のない部分。「チ」は、恐らく「地（地謡の略）」^{ぢうたい}で、そうならばナレーションの役割をもつ六く十二人による斉唱。「上哥」は、「かかるためしを日の本のく」と初めの七五の繰り返しを特色とする七五調の韻文で、叙情・叙景を内容とするものである。ここにも演出効果を意識した能楽的な構成が見られる。

巻末に「ぐわんぜ無魂大夫令章句志也（ぐわんぜ無魂大夫章句せしめ志すなり）」と記すが、これは能楽のシテ方家元である観世大夫の節付けを模したものと思われる。実在した観世左近太夫（九世 一五六六く一六二六、十五世 一七二く一七七四）をもじって「右近」、更に「右近・ウコン」を「無魂・ムコン」ともじったものではないかと推測する。寒泉の趣味は能狂言であった^{（注）}。

『なかづかみ』は、寒泉自ら架空の能楽師に擬し、趣味の延長として「戯作（戯れ作った）」した能楽小品といえる。

注

（１）翻刻にあたっては、以下のように処理した。

- 一、漢字仮名の別、送り仮名、仮名遣いについては、底本の表記に従った。
- 一、漢字の旧字体・異体字は、現行の字体に改めた。
- 一、底本の誤りと思われるものは右に（ママ）とした。
- 一、本文中に記された謡の小段は、（へ）に括弧で表示した。
- 一、読解を容易にするため、以下の方法を取った。
- 一、清濁の別については、底本の表記に従った。ただし、底本にない濁点を補う場合は、該当語の右側に（ ）で括弧で表示した。
- 一、読点は、底本に従った。ただし、底本には無い句読点の区別を設けた。
- 一、改行や改段落は、内容に即して適宜施した。
- 一、鉤括弧「」や中黒点・など底本にはない記号を適宜付した。
- 一、漢字を当てられるものは、該当語の右側に（ ）で括弧

て漢字を表示した。

一、振り仮名は、底本に従った。ただし、底本には無い振り仮名を補う場合には、現代仮名遣いによつて該当語の右側に（ ）に括つて表示した。

一、「ゝ」や「く」は、底本の表記に従った。ただし漢字の場合は「々」を用いた。また「く」の後には、省略された言葉を（ ）に括つて補った。

(2) 見世物に関しては以下の書を参照した。朝倉無声『見世物研究』（思文閣出版、一九七七年初版・一九九九年四版）、古河三樹『図説 庶民芸能―江戸の見世物』（雄山閣出版、平成五年）。

(3) 注2朝倉・古河前掲書所載による。

(4) 豹の錦絵・報状については、川添裕「見世物絵を楽しむ

3」（『月刊百科』三二九号、平凡社、一九九〇年）参照。

(5) 西村天囚『懷徳堂考』（明治四四年）下巻二一〇頁、および中井終子「安政以後の大阪学校」（『懷徳』第九号、昭和六年）参照。

(6) 『草茅危言』巻四「外船互市の事」「朝鮮の事」「琉球の事」、葛本一雄「朝鮮通信使の廃絶と中井履軒―徳川中期に見る日本的華夷思想―」（『東アジア研究』第二一号、大阪経済法科大学アジア研究所、一九九八年）、久保田恭平「中井竹山の蝦夷地開業論」（『北海道産業開発研究所紀要』第二・

三号、函館大学北海道産業開発研究所、一九七〇年）参照。

(7) 中国・琉球との貿易、朝鮮通信使に関する履軒の見解は、経世論集である『四茅議』の付録、および草稿集である『遺草合巻』の両者に収める「柔遠」に見える。『四茅議』『遺草合巻』ともに『華胥国物語（懷徳堂文庫復刻叢書三）』（吉川弘文館、平成二年）に収めるが、『四茅議』付録部分は収録していない。なお「柔遠」の所説は、竹山の『草茅危言』巻四に「或人の茅議雜篇」の説として紹介され、竹山の献策の一部を成している。

(8) 植手通有『日本近代思想の形成』（岩波書店、一九七四年）参照。なお『辺策』に関しては、湯浅邦弘編『懷徳堂文庫の研究』（大阪大学大学院文学研究科、平成一五年）所収の藤居岳人『辺策私弁』解題を参照。

(9) 『夢の代』歴代巻四、制度第五を参照。

(10) 注5所掲のものその他、羽倉敬尚「懷徳堂遺聞―並河寒泉と其の周辺―」（『懷徳』第二〇号、昭和一七年）、同「並河朋来の日記「居諸録」―懷徳書院教育の実相に及ぶ―」（上・中・下）（『芸林』八一―一三、芸林会、昭和三二年）、同「大阪学校懷徳書院最後の名教授並河華翁」（『東洋文化』復刊第一七号（通刊第二五一号）、無窮会、昭和四三年）、中井木菟麻呂「己巳殘愁録」（『懷徳』第一〇号、昭和七年）などがある。

(11) 懷徳堂の先学および寒泉の無鬼論に関する研究として、陶徳民『懷徳堂朱子学の研究』（大阪大学出版会、一九九四年）の第六章第三節「並河寒泉の『弁怪論』」がある。

(12) ただ注11の陶前掲書三六〇～三六一頁に、寒泉の曾祖父天民が蝦夷地開拓論者であったこと、安政二年（一八五三）の蝦夷地収公について寒泉が関心をもっていたこと、安政七年（一八六〇）の竹山の祭祀において寒泉が林則徐の詩幅を掛け、英国に対する強硬姿勢を貫いた林則徐を尊敬したこと、など寒泉の対外観に関係することらを紹介する。

(13) 能楽の構成・用語などについては、『謡曲集』（朝日新聞社〈日本古典全書〉、昭和二十四年）、『謡曲集』（小学館〈新編日本古典文学全集〉、一九九九年）、『大日本百科全書』（小学館、一九九五年）参照。

(14) 注5所掲『懷徳堂考』同巻同頁参照。